

## 教育実践に直結する授業実践の試み

教育実践高度化専攻 教授・太田佳光

### 1、授業の基本情報

- ・科目区分：大学院：教育実践高度化専攻
- ・授業科目名：学級経営の理論と実践
- ・担当教員名：太田佳光・城戸茂
- ・登録学生数：18名

### 2、授業内容・授業評価

#### ・授業内容

本授業は、大学院教育実践高度化専攻（教職大学院）の共通基礎科目であり、現職教員5名及び講師経験を持つ学生2名を含む13名のストレートマスターが受講した。担当教員は、太田と城戸であり、主に理論的な部分を太田が、実践的な部分を城戸が担当した。

本授業の目的は、以下の通りである。学級経営は、児童・生徒の人格形成を行う教育活動にとって、非常に重要な位置を占めている。受講生は、本講義の受講を通して、その学級経営の理論的・実践的方法論について、深く理解をし、実践に生かすことが出来る。さらに、到達目標は以下の通りである。①学級経営の基礎的理論について理解し、学級経営の重要性について説明ができる。

②学級経営の具体的な手法について理解し、望ましい学級経営案の作成を行う事ができる。

また、本授業で目指したのは、①高度な専門内容を体得するために、レクチャーを出来るだけ少なくし、自らが考える演習的な時間を多くとること。②グループ同士のディスカッションを中心にした、今後の自身の教育実践に役立つ理論の習得である。以下、実際の授業内容を確認しながら、本授業の概要を示したい。

まず、わが国における学級経営の理論的展開を確認するために、蓮尾直美他編『学級の社会学—これからの組織経営のために』ナカニシヤ出版、を参照して、年代順に次の五つの学級経営理論を抽出した。①大西忠治を中心とする全国生活指導研究協議会の集団作り論（いわゆる、班・核・討議づくり）、②片岡徳雄を中心とする全国集団学習研究協議会の集団づくり（いわゆる、支持的風土づくり）、③木原孝博によるAD理論（いわゆ

る、受容主義の学級経営論）、④向山洋一を中心とする教育技術の法則化運動、⑤河村茂雄によるQ-Uを利用した学級づくり論、である。

その後、現職教員をリーダーとしたグループ編成を行い、それぞれの学級経営論を選び、その実際と理論的特徴についてプレゼンによる発表を行った。そのディスカッションの中から、次のような知見を得る事ができた。例えば、班・核・討議作りにおいては、競争原理を用いた学級集団づくりが特徴的であり、学級経営論として、現代においても学ぶべき点があること。ただし、過剰な競争原理に陥る危険性があることなどである。また、支持的風土づくりは、現代の学級経営論としてよく用いられていること。ただし、その方法論がやや曖昧なため、実際の学級経営に生かしづらいことなどである。

こうした、理論的背景を基盤とした学級経営論の検討から、学級経営には、いくつかの基本的メカニズムが潜んでいること、それを自身の学級経営に生かすことができることを、体得できたと思われる。

#### ・授業評価

教職大学院のDPの到達状況調査により、以下のような結果が得られた。①教育実践に関する知識・理解：84%の受講生が達成したと回答した。②教育実践にかかる技能：83%の受講生が到達したと回答した。③教育実践に関する思考・判断・表現：95%の受講生が到達したと回答した。④教育実践に関する関心・意欲・態度：89%の受講生が到達したと回答した。以上の通り、本授業の受講により、多くの受講生が、その内容を体得しえたと思われる。

### 3、地域社会を核とした教育と研究のつながり

それぞれの学級経営論の検討には、愛媛県で実践を行っている現職教員の実践事例を含んで行った。また、受講生は、多くが愛媛県教員採用試験に合格した院生である。その意味からも、本授業の成果が、愛媛県を核とした教育づくりに資するものと思われる。